加納一朗探偵小説選　目次

ホック氏の異郷の冒険……1
ダンシング・ロブスターの謎……171
宙に光る顔……183

ホック氏・紫禁城の対決……202
ホック氏・香港島の挑戦……361
【解題】北原尚彦……520

凡　例

一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。

一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。

一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。

一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。

一、あきらかな誤植は訂正した。

一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。

一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

ホック氏の異郷の冒険

プロローグ

よく晴れた早春の一日、父と私は蔵の整理をはじめた。

庭の一隅にある小さな土蔵は、私の曾祖父にあたる榎元信が建てたもので、そのときから現在までほぼ八十年を越える歳月を、大地震や空襲をふくむ風雪に耐えてきていた。この蔵の内部を整理しようという話が持上ったのは、前年の春と秋に行われた京都の冷泉家内にある財団法人冷泉家時雨亭文庫の、文化庁による調査が、新聞紙上に報道されたときであった。文化財調査官を中心とする調査団は鎌倉時代以降堂上派の和歌の家として、伝統を伝えている冷泉家の土蔵から、国文学や歴史に関心のある者には衝撃をあたえずにはおかない数々の幻の名品を、二十世紀も終末に近い光のなかによみがえらせたのであった。そのなかには鎌倉期の歌人として藤原家隆と『新古今集』を撰進した藤原定家の直筆『明月記』や、定家の伝写した『古今和歌集』『後撰和歌集』をはじめとする数多の貴重な文献があった。この発見の報道は一私立大学の講師として、万葉を講じている私のような一学徒をも、一種の深い感動と興奮に誘いこまずにはおかなかった。

このとき、父が思いだしたようにいった。

「我家の蔵も一度整理する必要があるな。出てくるものはガラクタばかりだろうが、なにか面白いものが出てくるかもしれない」

蔵は物置代りに使われていて、ほとんど省みたことがなかった。私は幼いころ、面白半分に錆びついた錠をあけて入ってみたことはあるものの、大きな蜘蛛に出会って飛びだしたきり二度と入ったことがない。そのときのかすかな記憶では、わずかに物の輪郭が見えるほどの明るさのなかに、雑多な木箱や古びた箪笥や行李のようなものが積重ねられているばかりで、ほこりとかびの異様な臭気が充満していた。私は明り取りの窓があることも知らず、飛び出した時点から蔵への興味を失ってしまったのである。

父と私は蔵の整理について話し合ったものの、おたがいの忙しさから実行に移れないでいた。それが急速に具体化したのは年が明けてからであった。かなり老朽化し

た蔵を取りこわし、その部分に部屋を建増しする計画が急に具体化してきたからである。

あらためて蔵の前に立ったとき、私はある種の感慨を抱いた。蔵は私の物心ついてからおなじようにここに建ち、いつか私の記憶のなかで私と一体化していた。ひびの入った灰色の漆喰の壁、青さびた瓦、風雨に傷んだ分厚い頑丈な戸――蔵がここにあるのは山があるのとおなじように自然であり、蔵が無くなった光景を想像するのがむずかしかった。

父と私はトレーニング・パンツという軽装で蔵の内部のものを外に運びだした。曾祖父と祖父が収納したものが次々と庭に並べられ、陽光を浴びてひろげられた。時代ものの漆器、値打のない花瓶、籐で編んだ籠、古びたランプ、二銭の切手を貼った手紙類、ぼろぼろになった衣類、こわれた椅子、机、長火鉢、小箪笥――小さな土蔵に押しこめられていた雑多な道具類はひろげるとせまい庭にあふれるほどであった。

いまの時代の人とはちがって、倹約が身についていた明治大正の人たちは、不要のものも棄てるに忍びず、みな蔵のなかへ入れておいたらしい。長持のなかからは家紋の入った麻裃まで出てきた。戸棚からはいかにも素朴な手造りの細工といった感じのワイングラスやガラスの皿や時代がかったクレーのパイプが明治末期の黄ばんだ新聞紙に厳重につつまれて出てきた。

「みんな、祖父さんのものらしいな」

と、父がいった。父にとって祖父である元信は一九一八年（大正七年）に六十二歳で亡くなっており、父は一九一七年（大正六年）に生れているから、父に祖父の記憶はない。

「私は私のおやじから、よく祖父さんの話を聞いたよ。なかなか勉強家で気の強い人だったらしいな」

と、父はワイングラスをふきながらいった。私は傷だらけの机のなかを片付けていたが、いちばん下の引出しをあけたとき、そこに固く紙につつまれたものをみつけて、包装を解きはじめた。なかには渋紙でつつみ紐をかけたものがあった。厚さ約三センチ、週刊誌大の大きさの包みである。

開けてみると、それは黄ばんだ美濃半紙の束であった。毛筆の達筆で、細かい字がおどるようにぎっしりと書かれていた。包みかたの厳重さといい意味ありげな手稿といい、ふと私はこれは曾祖父がその人生で秘めておきたい部分を書いたものではないかという気がした。

曾祖父の榎元信は医師であった。晩年は現在の住所で開業医として過した。内科を専門としていたという。その子たちは、いずれも医師を継がず、いまでは父の弟――私の叔父の家系に医師がいるだけで、祖父、父、私

と三代にわたって教職についている。

私は整理の手を休めて手稿を拾い読みしてみた。そのうちに次第に内容に惹きつけられて、整理のほうは完全に留守になってしまった。父がなにをしているのかと寄ってきたが、私の話を聞くと、父もまた整理を放りだして私と一緒に読みはじめて動かなくなってしまったのである。

以後の蔵の整理は極めておざなりなものになってしまい、妻と、小学校から帰ってきた息子に手伝わせて、なんとかその日は終らせてしまった。

この手稿の内容について、その夜、父と私のあいだにちょっとした論争が生じた。この手稿の内容はフィクションなのか、それとも曾祖父の実際の体験なのかが論争の焦点であった。父は実際の体験であると固執して譲らなかった。榎元信は文学的な才能を持っていなかったというのである。それに対して私は曾祖父がひそかに虚構の物語を書いたにちがいないと反駁した。

こよりで綴じられた手稿の第一ページには題名も署名もなく、ただ一行、一八九六年秋記之、と書かれているだけである。明治二十九年と書かず西暦で年号を記したところが、私には文明開化の尖端の医学者らしい気負いと感じられた。

私はその夜から余暇をさいて、曾祖父榎元信の〝手記〟あるいは〝小説〟の現代語訳に着手した。興味のおもむくままに、そんなことをしてみたのである。手稿はそれ自体でも決して読めなくはないのだが、漢語が多いし文語体でもある。〝翻訳〟上の留意点としては、たとえば当時の英語の読み方でリンカーンをリンコルン、フレーザーをフリゼルなどと表記しているのを正したが、洋燈、停車場などはいかにも明治中葉の感触が出ているように思われるので、あえて残すことにした。

さて、この手稿の内容は一つの犯罪譚であり、曾祖父がひとりのイギリス人と協力して事件の解決に奔走する話である。これが〝手記〟であるか〝小説〟であるかは、読んだ方の判断に委せたいと思う。

第一章　サミュエル・ホック氏

私は一八五六年（安政三年）一月、江戸本所石原で生れた。父は幕府直参とはいえ微禄の旗本であったが学問の好きな人で、生活の足しにするためにわずかな礼金をとって、近所の子供たちに漢学の初歩を教えていた。維新によって世相が一変すると、生活の補助のためだった私塾が本業になり、読み書き算盤に手を広げて生徒をとりはじめたが、やがて新設された小学校の教員になり、

一八七七年（明治十年）西南戦争の年に五十七歳で病死した。

私は少年時代から医師になりたかった。十歳のころ、儒者林鶴梁に漢学を学び、維新後に独学でスペンサー社会学、フォーセット理財学、スイントン英語文法書、クワッケンボス修辞書、などを修めた。わけても英語、独語などを熱心に勉学し、ようやく伝手を得て蘭医のもとに住みこみ、そこから苦学生として高田医学院に通わせてもらうことになった。昼は診療の実際を見、薬を調合し、夜は深更まで医書をひもとき二十五歳でようやく医師の資格をとり、開業免許を得たときは正に天にも昇る心地がしたものである。

だが、開業するための資金もなく、また、これまで世話になった寄宿先の医師のために数年間は御礼奉公のかたちで、代診を勤めざるを得なかった。時代の変化は医学の世界をも一変させ、漢方医は次第にうとんじられて影を薄くし、蘭医また然り、維新後の医学界にはとうとうと独逸医学の波が押し寄せてきていた。

やがて世話をしてくれた医師が引退することになり、繁昌している医院を譲ってもいいといってくれたので、私はよろこんでこれに応じ月々一定の額を払うことにして、この医院を引き継ぐことになった。

しかし、私の夢は一開業医として市井に埋もれることではなく、いつかはベルリンのロベルト・コッホ研究所のようなところへ留学して、世界の最尖端の新知識を吸収したいということであった。東京大学医学部が開設され新制度が整うにつれ、全国の秀才が雲のように集うのを見聞すると、いっそう私の内部で夢がふくらんでくるのであったが、現実はその夢を許さない状況であった。

ささやかな私の医院には、それでも日々何十人かの患者が訪れてくる。その人々を診療し、買いとった医院の金を払わなくてはならないことを考えると、留学はまさに夢である。

さいわい私の治療の評判は悪いほうではなく、次第に上流階級の知己も得て、その方面へ往診することも度々であった。

一八八八年の四月のある夜、発熱した患者を診察しに往診したことがあった。患者の名は陸奥宗光といい外務省に勤務する、当時は無任所外交官の地位にある高官であった。陸奥宗光の名は知っていたが相対するのは、むろんこのときが最初である。彼は明らかに風邪をこじらせ肺炎を起す一歩手前であり、しかも私の診るところ胸を冒されているとみえた。ただちに私は必要な手当をほどこし、室内に蒸気を絶やさぬよう家人に注意した。病人は元気で雄弁であった。話を交す間に俗にいうウマが合ったとでもいうのか、意気投合して十年来の知己のよ

うに親しくなった。

やがて、宗光はその年の五月半ば駐米特命全権公使として渡米した。この米国駐箚中にメキシコ国と対等の条約を締結し、日米間の条約改正に着手し、新条約を調印するにいたったことは吾人の記憶に新しい。宗光はその功績をもって一八九〇年（明治二十三年）一月、帰朝した。帰国するや一夜、私を呼んで烏鷺を戦わし、四方山の話に打ち興じたが、その際も軽い咳を発し、病状が進んでいることをうかがわせた。

一八九一年は年頭から大きな出来事が続いた年であった。まず、一月に日比谷の帝国議事堂が漏電で焼失し、二月には維新の元勲である三条実美公が没し国葬が行われた。五月に山県有朋を首班とする内閣が辞職し、松方正義が内閣を組織してわずか一週間後、ロシア皇太子ニコライが訪日中の大津で暴漢に襲われ負傷するという事件が起き、天下を震駭させた。政府は狼狽しこの後始末が終らぬうちに七月十一日には清国の北洋艦隊が、丁汝昌を提督として横浜に来航した。旗艦である装甲砲塔艦『定遠』をはじめとする七隻である。この来航の目的は表に友好を唱えながらも明らかにその本質は我が日本帝国に対する示威である。当時の国情については、記憶を呼び醒しながらのちに詳細に触れることになるので、ここでは来航の記録にのみとどめたい。

また、この年の十月には濃尾地方を中心として大地震が発生し、死者七千二百余人を出したが、これはこの年の重大な出来事として記録さるべきである。

私はみずからの職務や勉学に追われて三十二歳でようやく結婚した。妻は零落した旧幕臣の娘で、私とは十歳違いの二十二歳で、名を多喜といった。小柄ながら健康な愛くるしい娘で、私の仕事もよく助けてくれ、翌年には玉のような男子に恵まれていた。

九月も末の、たしか二十六日の夜であった。私は急な胃痛にみまわれた日本橋本石町の商店主の妻を診察して七時すぎに帰宅した。その日は朝から患者が多く訪れ、きわめて繁忙の一日であったから、私はかなりの疲労を感じ、この疲労を癒すには一杯のスコッチ・ウイスキーに如くはないと、そのまろやかな味を想像で楽しみながら戻ってきた。そして、多喜が下婢とともに用意しておいてくれた夕食の前に、待望のウイスキーのグラスを口にし、膝に三歳になった息子の元晴を抱きながら、あどけない口でしきりとその日の出来事を話すのを聞いていると、いつか快い睡魔が私をとらえはじめた。

「あなた、お起きになって。陸奥様から急なお使いですよ」

妻の声にはっと私はまどろみから醒めた。妻は一通の

書状を差出した。

火急なる用件有之　使いの者と御来駕被下度候

宗光

このころ私は農商務大臣となっていた陸奥宗光から時折り、碁の誘いを受けることがあった。そして、問われるままに天下国家の論を、私なりに感じたままをおこがましくも述べたりして、談論風発、いつか烏鷺はそっちのけになり、唾を飛ばして論議することもあり、そして、たいていは宗光の論に啓発され、彼の該博な知識と先見の明の鋭さに圧倒されるのが常であった。宗光としては私の強情ぶりが面白かったのであろう、適当に私の論法を、いなしておいて、おもむろに識見の正鵠を突いてくるのである。私はその都度、頭から冷水を浴びせられた想いがして降伏せざるを得なかった。一時の興奮がさめてみれば宗光は要路の高官であり、私は一市井の医者にすぎない。その生立ちから今日までの経歴もあまりに異なる。だが、四十七歳の宗光は、三十六歳の私にとってわずか数歳上の兄のように若々しく、それが私をして、つい友人同僚に対するように遠慮の垣を取り払った態度をとらせるのである。

私は宗光からの書状を、再度読んだ。

「これはいつもと違うようだね。碁のお相手なら今夜はお断わりしたいところだが、差迫った御用らしい。行かなければなるまい」

「そうですね。お使いのお馬車がお待ちです」

「ほう、馬車が……」

青山の私宅から渋谷松濤の陸奥邸まで、私は常には人力車を走らせる。先方から馬車の迎えが来ることは、かつてなかったことであり、その一事からも火急の用という言葉の内容が重要なものらしいと察せられた。

「御容態にお変りでもあったのでございましょうか」

と、多喜が心配気な顔を私に向けた。

「いやいや、そうではあるまい。胸の病いをお持ちだが病状の進行は緩慢だし、先日お会いした際も至極お元気だった。この書状は直筆だが筆勢もしっかりしていて、御病気とは見受けられない。それに、発熱でもあればその旨を使いに托してくるだろう。なにか、ぜんぜん別のことだよ」

私はただちに仕度を整え、玄関を出た。深まり行く秋の気配を感じさせる虫の声があちこちの草叢からかまびすしく聞え、白い靄が靉靆として街衢にたなびいている。玄関の前には二輪馬車が待受けていて、私の姿を見ると顔を見知っている馭者の又七が、一礼して扉をあけた。乗りこむとただちに又七は馬に一鞭をくれ、馬車は車輪の音も高く走りはじめた。

私は馬車の震動に身を委ねながら、陸奥宗光からの急

用とは何事であろうかと思いをめぐらせた。いつものような世間話や碁の相手でもなく、病気に関することでもないとすると何事であろうか。種々、忖度してみたものの、まるで見当がつかない。

思案しているうちに馬車は渋谷宮益の坂を下り、間もなく陸奥邸の門を入って止った。

私は下婢にみちびかれて洋式の居間に通された。主人の健康を気づかってか大理石のマントルピースのある暖炉には火が燃え、部屋のなかは適度にあたたかく、壁のいくつかのガス灯の炎が部屋を明るく照らしていた。私は中央の長椅子とテーブルを前にしてしつらえられたゴブラン織りの優美なかたちの椅子に腰を下ろし、巻煙草に火をつけた。屋敷内は森閑として物音といえば暖炉の薪のはぜる音のみである。私は壁面にかかる『九天於動』の扁額をながめた。その四文字はこの家の主人の、有為転変の人生を象徴しているかのようである。

宗光のこれまでの人生は栄光と挫折の繰返しである。政府に重用されるやたちまち意見を異にして野に下り、さらに登用されると政策をめぐって衝突し、わけても西南の役に際しては、薩閥大久保利通派の専制を排斥せんとして意ならず、武力をもって大久保一派を倒そうと計画した土佐立志社の大江卓、林有造等に加担したとして、元老院幹事の身でありながら五年の刑を受け、山形、宮城の監獄につながれる身となったほどである。出獄すると彼は郷里和歌山に帰り、県民の熱狂的歓迎を受けたが、一八八三年（明治十六年）伊藤博文が憲法調査を了えてオーストリアから帰朝すると、ただちに宗光に会い外遊をすすめ、宗光はやがてオーストリアはウイーンのスタイン教授のもとに旅立つことになった。政府はこの俊敏剃刀のごとき頭脳を持った有用の人物を無視することができなかったのである。彼はスタイン教授のもとで伊藤と同様、憲法のいかなるものかを学び、帰途、英国に渡ってつぶさに国法、行政、議会制度の運用についての知識を吸収して八六年に帰朝した。その年の十月、任官に同意しただちに弁理公使に任じられ、米国へ渡り日本メキシコ、日本アメリカとの条約を締結させて、明治二十三年帰国していたことは前述の通りである。そして、その年七月一日に第一回の衆議院議員選挙が施行されるや和歌山から立候補して当選したものの、次の年の九月十三日にはその職を辞していた。

私が陸奥邸に招かれたのは、彼が議員の職を辞して二週間後のことだったのである。

待つほどに廊下に足音が聞え、この家の主がくつろいだ和服姿で入ってきた。宗光は痩身長軀、面長の英国紳士的風貌をしている。鼻下から顎にかけて髯を伸ばし、わけてもその眼光は炯々として紙背に徹する鋭さを秘め

ている。
しかし、いつもは私に接するときその眼は温和に楽しげな光を宿すのであるが、その夜の彼の表情は沈鬱なものに彩られていた。
「御前、急なお呼び出しでございますね。拝見すればお元気そうでいらっしゃいますが……」
「身体のほうは小康を保っている。まあ、この分なら大丈夫だろう。まあ、くつろいでくれたまえ、間もなくもう一組、来客がある。話はそれからだ」
私はこのときも何事かと胸を騒がせたが、もう一組の来客があるまでは話したくないのであろうと察して、あたりさわりのない話題を持出してみたが、宗光はその返事も上の空で、下婢に運ばせたワインにもほとんど口をつけなかった。
かくしているうちに表にあたって轣轆と馬車の音が聞え、宗光の待っていた客が到着した様子であった。
「きみは英語がかなりうまかったはずだね」
と、椅子から身を起しながら宗光がいった。
「御前ほどではございません。横浜居留地で貿易を営むジョンソン氏について三年ほど習いましたが……」
ジョンソン氏は商人に似ずおおらかな人柄の人物で、私は医学校に通うかたわら週に一度この人のもとで英会話を習得したのである。
ドアがノックされ、開かれると下婢に案内された人物が入ってきた。最初に入ってきたのは小肥りの西洋人で亜麻色の髪に同色の顎髭を生やし、チョッキに金鎖をつけている年のころ四十半ばと思われる人物であった。彼は満面に笑みをうかべ、立上った宗光に大股で近づくと手を伸べて力強い握手をした。
続いてもうひとりの外国人が入ってきた。その男はほぼ私とおなじ年頃に見えたが、背は五尺六寸の私よりさらに二、三寸は高く、鶴のように痩せていた。まず、私の注意を惹いたのはその灰色の瞳であった。射るような鋭い光を放ち、こけた頬と薄い引結んだ唇と鷲のように高い鼻とあいまって、ある種の気魄といったものを放っている。意志的な角張った顎をぐっと引いて、この男はまず宗光を見、ついで私に視線を向けた。
「榎君、ご紹介しよう。こちらは英国公使ヒュー・フレーザー君……」
宗光は私の名を小肥りの男に告げた。彼は幾分尊大な態度で私と握手を交した。
「閣下、サミュエル・ホック氏です……」
公使は背後の男を宗光と私に紹介した。ホック氏と呼ばれた男は、慇懃に宗光に礼をし宗光の手を握り、次に私に向って手を差し伸べた。
「はじめまして……」

［著者］**加納一朗**（かのう・いちろう）
1928 年、東京生まれ。本名・山田武彦。当時の満州国大連で育ち、帰国後、二松學舍専門学校国文科を卒業。教育委員会勤務や編集者を経て、60 年に『宝石』へ投じた「錆びついた機械」が掲載されて作家デビュー。推理小説のほか、ジュブナイル、SF、時代小説まで幅広い分野で執筆活動を展開し、また、アニメ業界でも脚本家や作詞家として活躍した。84 年に探偵作家クラブへ入会して書記局担当となり、同年、「ホック氏の異郷の冒険」で第 37 回日本推理作家協会賞長編部門を受賞。1967 年から 93 年にかけて日本推理作家協会理事を、88 年から 2005 年まで日本文芸著作権保護同盟理事長を務めた。高齢のため、現在は執筆活動を行っていない。

［解題］**北原尚彦**（きたはら・なおひこ）
1962 年、東京都生まれ。青山学院大学理工学部物理学科卒。作家、翻訳家、シャーロック・ホームズ研究家。日本推理作家協会員、日本古典 SF 研究会会長。主要著書は小説『ジョン、全裸連盟へ行く』（ハヤカワ文庫）、『ホームズ連盟の事件簿』（祥伝社文庫）、エッセイ『シャーロック・ホームズ 秘宝の研究』（宝島社 SUGOI 文庫）、編書『シャーロック・ホームズの古典事件帖』（論創社）、訳書『シャーロック・ホームズの栄冠』（創元推理文庫）ほか。『シャーロック・ホームズの蒐集』（東京創元社）で日本推理作家協会賞候補となる。

加納一朗探偵小説選（かのういちろうたんていしょうせつせん）　〔論創ミステリ叢書 112〕

2018 年 3 月 20 日　初版第 1 刷印刷
2018 年 3 月 30 日　初版第 1 刷発行

著　者　加納一朗
装　訂　栗原裕孝
発行人　森下紀夫
発行所　論 創 社
〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル
電話 03-3264-5254　振替口座 00160-1-155266
http://www.ronso.co.jp/

印刷・製本　中央精版印刷

©2018 Ichiro Kano, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1682-1